

神に対する恨みと復讐、世界乗っ取り計画

平和統一 NEWS No. 94 (2016/7月号)

渡辺 久義

ベルリンの壁が 1989 年に崩壊するまで、共産主義と戦い、共産党に対して、「共産主義の本質を知っているのは、君たちより我々だ」という、ある種の優越感をもって闘争してきた、「勝共運動」と言われる運動をやってきた人たちがいる。彼らの出番は今である。今こそ、彼らが使命を果たすべき時である。

この勝共運動の闘争理論を提供した本の一つに、李相憲著『共産主義の終焉』という本があり、ここに、マルクスの若い時の「絶望者の祈り」という詩が引用してある。——「神が俺に、運命の呪いひと軀だけを残して／何から何まで取り上げて／神の世界はみんな、みんな、なくなっても／まだ一つだけ残っている、それは復讐だ！／俺は自分自身に向かって堂々と復讐したい。／高い所に君臨しているあの者に復讐したい／・・・一つの国を俺は建てたのだ／・・・人間どもは、死人のように蒼ざめて、黙って後ずさりするがよい・・・」

自分自身を含めた人間そのもの、この惑星そのものへの復讐、神を追い出して世界を乗っ取ろうとする欲望、これは New World Order というものの樹立を目指す、今その正体が明らかになった者たちの動機そのものである。絶望と一つになった世界征服慾——この狂気の妖怪が、今、世界を抑え込んでいる。これは、この本が書かれたときのように、ロシア（当時ソ連）の背後にいてのではない。アメリカ帝国の背後にいて。神側、サタン側という言葉を使うなら、明らかにロシアが神側、アメリカがサタン側である。ワシントンの、メディアを使った悪辣なプロパガンダをそのまま信じて、いまだにロシア（プーチン）が悪いのだらうと考えている人は、頭を切り替えてもらわなければならない。戦うべき共産主義の大元は、米政府の背後にいて。「我々はどのような世界に生きているのか？——この異常な世界の背後に見えてくる暗黒集団」という論文（創造デザイン学会 5/22）で、私が言いたかったのはそれである。

プーチンは、理性、話し合い、平和主義、主権の尊重を代表する。一方、オバマは最初、ノーベル平和賞までもらいながら、なぜこれだけ大量に殺すのか？ 一つのヒントは、彼がかつて、ソール・アリンスキーという極端な共産主義者に傾倒したという事実である。このアリンスキーは、自分の著書をルシファーに献呈した。米政府の背後の、「イルミナティ」と

自称する陰謀団は、自分たちを、はっきり Luciferian (ルシファー教徒) だと言っている。

今こそ「勝共運動」の出番だと私がいうのは、彼らが、ルシファーというものの性格をよく知っているはずだからである。ルシファーの血を引くカインは、アベルを殺したが、それは神が、アベルの供え物は受け取ったが、カインの供え物は受け取らなかったことから、神に対する恨みと復讐心が生じたからであり、それが共産主義の本質として現在に受け継がれているという教義を、彼らは叩き込まれているはずである。では、それが現在の日本共産党の背後にあるのだろうか？ 何とも言えないが、彼らがそんな恐ろしい者とは考えられない。戦うべき恐ろしい者が近くにいるとすれば、それは無批判に、無自覚に、アメリカの戦争犯罪に協力する者たちである。

現在、ほとんどの日本人が知らないでいるが、ロシア国境に、陸海空総力で、大規模な米-NATO 軍が結集し、いつ第三次大戦の大惨事が起こってもおかしくないという、文字通り、狂気の事態が出現している。これは神側とサタン側の対峙というべき構図である。ハルマゲドンの構図といってもよい。先日、ポーランドで行われた、前代未聞の、NATO の大軍事演習を、ドイツのシュタインマイヤー外相ですら、「戦争屋どものわるさ」と糾弾した。アメリカが恐ろしいのは、「俺は自分自身に向かって復讐する」という、終末的自暴自棄を否定できないからである。

ところがこれを、日本のメディアは全く報道しない。これは明らかに、アメリカに対しては、戦争犯罪であろうと、核戦争であろうと、柔順で協力しなければならないと、考えているからである。そうしないと商売をさせてもらえない、暴力団に怯える商店主と同じである。しかし犯罪者に協力する者は犯罪者であり、勝共運動がまずターゲットとすべきは、メディアという米帝国主義の走狗であろう。キューバの前首相フィデル・カストロは、敵を研究し尽くして、最も有効に敵を敗北させる、反プロパガンダの戦略を考えるべきだと言った（「平和の手段としての反プロパガンダ」6/18）。かつての勝共運動も、敵以上に敵を知っていた。

私の論文を読んで、「中国という目の前の脅威はどうするのだ？」と言った人がいる。まず中国は、米政府背後の陰謀団のように、何世紀もかけて、緻密に地球乗っ取りを計画してきたような集団とは違う。それに、現在のように、いつ米露間が暴発するかもしれない時期には、中国は、中露同盟を通じて、抑止力として働いていることを忘れてはならない。